

原爆被爆体験記

広島県三原市 向井 渉

バン、瞬間、ドカン、ガラガラ、恐る恐る見上げる。今まで雲一つない焼けるような太陽が一面に霧に包まれる。雲海すら思わすようで。

入隊6日目の朝食後、食器を洗い軒先伝いに10m余り歩く。8時過ぎ頃なのか、校舎の部屋から数人の女性が大声で泣きながら駆け出す。髪は一面に砂ホコリでも被ったようにバサバサで、上衣も下衣も炸いた跡を思わす。頭顔からも流れ落ちる血潮で廊下に尾を引く。腕もブラリと下げたまま、恐怖の余りに声も出ないのか、無意識に歩き廻る人、懸命に室から這い出そうとする人達もそれぞれに怪我など受けている。但し今は誰も助ける者もない。余りの恐ろしさに自分の身を守る人々で、ここは校舎と校舎の間なので直射のみは逃れた。何事なのか物凄いあの音。爆弾か。次に何個落とされるのか。数分間が過ぎる頃、人々の泣き叫ぶ声、唯々無遊病者のように走り回る人陰も、互一瞬の出来事なので、多くの負傷者で、唯々茫然となる数分間。幸いに今夏休み中で児童の姿はない。

8時30分も近い。ここは三篠小学校内で、自分達部隊の仮営舎である。「全員校庭に集合せよ」。10歩程走り出す、右足に痛みを覚える。見るとズボンの上面が赤く血に染る。でも今は指示ゆえに痛みも我慢する。他の者に遅れる事は死につながる。100名余りの隊員の集合で、総員550数名の部隊である。他の者の消息はどこに、思いながら指示を待つ。その数分間、炊事場の窓から煙が吹き出す。見る間に煙の勢は増す。朝の炊事の時の残り火が何かに燃え移ったのか、また学校の周囲の家々の屋根瓦の上面に、夜のかがり火など思わせるような火の玉模様など、花火の散る光景か。次第に屋根一面に広く延びる。木造建築ゆえに火の回りは早い。カラカラ乾きのせいで火の勢は増すのみで、今は誰も消火する者もない。互にこの場から一歩でも遠く離れたい人情で、その時「全員三滝山に避難せよ」。

周囲など見回すと校庭の隅にポプラの大木の根元に農家の飼牛がつながれてある。毎日夜明けと同時に荷車を牛に引かせて野菜など市場に運ぶ。帰りに人糞など採集して車に積んで帰る。どこかで被災に逢ったのか、飼主は牛の傍に姿もない。2t程の茶色の雌牛で、このまま見過ごすと焼死する。可哀相なので手綱を解いて山裾の安全な所に追い放す。可部線の線路伝いの避難中、線路の下敷の枕木が燃え出す。

傍の歩道に真新しい自転車、歩道の中央に置去りで、持主の姿は見られない。放置するところの自転車も数分間の運命である。今頃新品の自転車は珍しい、どこか安全な所にと押して歩く。他の者達は横目で見ながら行く。その後ろ姿を見失わないようにと急いで後を追う。三滝病院の前に、患者は軍人の服装のようで、上半身の背中 of 皮膚はめくられて赤身が見える。窓際辺りにいたのか、傍に10名位が横寝のままで、かすかに聞えて来るうめく声なども。看護婦の姿は見えない。何事か訴えたいのか、我等に向かって手招きする者。でも我等には今は指示の他

は何もできない。唯々手を振りながら通り過ぎる。

細い坂道を登る。小高い平地の丘に出る。この所からは広島市内も一望にできる。丘から見渡す市内は哀れ火の海と化しつつ、真赤な炎がなめるように広がる。時々物凄い炸裂する音、爆弾なのか隊内からも色々と不安の声なども洩れる。200名余りの隊員数で、校舎内に残る私物など持ち出して来たとのことで、互に自分の私物などを受取る。

時刻は午前10時を回る。火災は時と共に強く燃える。ここでも燃え放題で消火する人影はない。部隊は次の指示を待つ間の数分間、突然に青空の一角に切れ雲が出る。風も吹き出し気持ち良く肌を撫る。

10時30分、雲が足早に走る。見る見る黒雲に替わる。風も強まる。遠方に稲光が尾を引く。数秒後物凄い雷の音、瞬間頬にポツンと水の粒、同時に雨の粒が落ちる。

10時50分、風と共に荒れる雷の音、まるで台風のように振り出す雨、シャクでかけるような雨が、あの晴天の数分前の空、まるで嘘のようである。互に雨具の用意はない。頭からズブヌレになる。互に身体を寄相いながらその時刻頃より自分は胃病が起る。余りの痛みに横になるが効果はない。痛みは激しくなる。歯など喰いしばる思いで我慢に耐える。その間に火災も雨のためか、燃え尽きたのか、火の勢いも衰えたようで無気味な音も途絶える。あの時節外れの台風並の嵐、稲妻、雷も、激しく降った雨も小降りになり、黒雲も薄雲に替わる。方々に青空も見られる。

午後1時全員この所から移動する。伝わる指示、直ちに私物の整理を済ませて全員出発である。私は先刻の登り道の反対側の小道を下る。雑草などかき分けながら降ること20分、水田の見える平野に出る。今は雲一つ見えない青空、部隊は2列縦隊で進む。約100m程歩く、広い空地で部隊は休憩す。その時突然にも聞こえて来る男性の声。「オーイ、子供に乳を飲ますな。死ぬぞ」彼方からの叫ぶ声。周囲は多数の避難者、負傷者などで道の両側には疲れ切った人々が座ったままである。動く気力も失なったようで誰かを待つ顔で辺りなど見回す人、皆異なった動作の人々で今はまだ救援の手も届いていない。真夏の午後、雨あがりの日差しが容赦なく負傷者に照りつける。傍に新聞紙、毛布の切れ端、ダンボール、他には雑草の上に敷物もないのか横寝する者、傍では人々の苦痛な声も洩れて来る。他の人々にも手の尽しようもない。気休めに手の平で蠅など追い払うぐらいで。衣類も残りの半分ぐらいを身にまとい、皮膚は赤身など露出している。雨に逢ったせいか切れ下っている。傍で一人の女性が幼児に指先で口に乳房を押しつける。生後10ヶ月ぐらいか、女性の頭にも怪我が白い布切が見られる。幼児は眼を閉じたままで乳も飲む気力もないのか、その顔など見詰める女性の悲痛な横顔。その折に再度伝わる男性の声、「乳を飲ますな、死ぬぞー」悲しみのこもる声、思わず自分に気がつく女性の弱い声で、「坊や死んでもいいから飲んで、飲んで」と何度も途切れる声も、愛しい我が子供故に最後の乳房を口許に寄せる。これも母性愛の絆である。この哀れな負傷者の母と子、人の命の運命なのか。彼方から伝わる負傷者の訴える声、「兵隊さん薬を下さい。身体中焼けるようで背中も痛みます。足も手も」疲れ切った弱い声も途中で絶える。午後の日差

しを浴びる負傷者に戻る返事は、「今部隊にも薬の手持もありませんので、地方の人は町内より支給を受けて下さい」と傷病班からの冷淡にも聞こえる声。この生地獄変とも想われる目の前の有り様など、後日の人々は信ずるであろうか。後世までも記憶に継いでおきたい。まだ到着なき救援隊を待ち続けるこの場所での多くの避難者、負傷者の方々に温かい手の延びる事を祈る気持ちで、我が部隊はこの現場を今、後ろ髪など引かれる思いで出発する。